



# こうせき 勝海舟の功績



## とべい 渡米までの勝海舟

### ●10代の頃

けんじゆつ ざぜん ね お おこな くる とき  
剣術や座禅を寝る間も惜しんで行ったため、苦しい時も、  
すこ とうよう たいしよ たんりよく つちか  
少しの動揺もなく対処できる胆力が培われた。

### ●20歳の頃

えど ぼくふ おく たいほう がいこくご  
オランダから江戸幕府に贈られた大砲に書かれた外国語  
い み  
の意味を知りたくなり、オランダ語を学びはじめた。

### ●25歳～28歳の頃

ご じしよ  
全58巻のオランダ語の辞書、「ドゥーフ・ハルマ」を一年間  
か うつ さく ましやうざん がくしや  
で二部書き写した。その後、佐久間象山という学者から外国  
へいほう せんじゆつ まな きやうみ べんきやう  
の兵法(戦術)を学んだり、いろんなことに興味を持ち勉強  
けっか じぶん じゆく ひら  
した結果、自分の塾を開くことができた。

### ●38歳の頃

かいぐんぎじゆつ ため ぐんかん かんりんまる  
1860年、日本の海軍技術を試すため、軍艦・咸臨丸の  
せんちやう たいへいよう おうだん  
船長としてサンフランシスコまで太平洋を横断した。かか  
とちゆう たいちやうふりよう  
つた時間は**37日**！途中、体調不良になったが、なんとか横断  
せいこう きんだいてき まちな すす  
に成功。サンフランシスコでは、近代的な町並みや進んだ  
さんぎやう おどろ みぶん いえがら  
産業に驚いた。そして、日本のように身分や家柄ではなく、  
せんきよ こうへい 民しゆてき せいじ おこな  
選挙によって公平で民主的な政治が行われていることに  
かんしん  
感心した。

きこくご こうべ かいぐん くんれんじよ にな  
帰国後、神戸に海軍の訓練所を創り、新しい日本を担おう  
わかもの ぼくふ ぜんこく あつ  
とする若者を、幕府の人間だけでなく全国から集めた。その  
さかもとりやう ま  
中には、坂本龍馬もいた。



## とべいご 渡米後の勝海舟

◆<sup>きこく</sup>帰国して<sup>すうねんご</sup>数年後、<sup>くまもとしゅっしん</sup>熊本出身の<sup>せいじか</sup>政治家・<sup>よこいしやうなん</sup>横井小楠と<sup>であ</sup>出会う。その<sup>えいきやう</sup>影響を受けて、政治を「<sup>う</sup>幕府の<sup>つごう</sup>都合で<sup>かたち</sup>行う形」から「<sup>みんなのため</sup>みんなのために<sup>みんなで行う形</sup>」にするために<sup>がんば</sup>頑張った。自分たちの<sup>りえき</sup>利益や<sup>だいいち</sup>立場を<sup>かんが</sup>第一に<sup>たい</sup>考えがちな幕府に対し、海舟は幕府の<sup>にんげん</sup>人間でありながらそうではなかった。そんな中、<sup>さつまはんし</sup>薩摩藩士の<sup>さいごうたかもり</sup>西郷隆盛などと<sup>であ</sup>出会い、人々に<sup>えいきやう</sup>影響を<sup>あた</sup>与えていた。

◆<sup>とうじ</sup>当時、<sup>さこく</sup>鎖国を<sup>かいこく</sup>続けるか<sup>にほんかくち</sup>開国するかで<sup>はげ</sup>日本各地で<sup>あらそ</sup>激しい<sup>お</sup>争いが<sup>つづ</sup>起こっていた。争いが<sup>つづ</sup>続けば、<sup>いぎりす</sup>イギリスや<sup>ふらんす</sup>フランスなどの<sup>かいにゆう</sup>介入を受け、日本は<sup>しょくみんち</sup>植民地になっ<sup>せんか</sup>てしま<sup>つつ</sup>うか、<sup>せんか</sup>戦火に<sup>おお</sup>包<sup>ぎせいしゃ</sup>まれ<sup>かんが</sup>多くの犠<sup>ゆ</sup>牲者が<sup>すえ</sup>出<sup>ききかん</sup>てしま<sup>すえ</sup>うと<sup>かんが</sup>考<sup>ゆ</sup>えた。海舟は日本の<sup>ゆ</sup>行く<sup>すえ</sup>末に<sup>ききかん</sup>危機感<sup>すえ</sup>を抱<sup>すえ</sup>いた。

<sup>え</sup>江戸<sup>ど</sup>総<sup>そう</sup>攻<sup>こう</sup>撃<sup>げき</sup>の前<sup>ぜん</sup>日<sup>じつ</sup>、海舟は<sup>しんせいふぐん</sup>新政府軍の<sup>かいだん</sup>西郷と<sup>のぞ</sup>会談に<sup>のぞ</sup>臨み、**江戸総攻撃の中止**を<sup>ちゆうし</sup>強<sup>つよ</sup>く<sup>うった</sup>訴<sup>う</sup>えた。西郷は「<sup>ならば</sup>、江戸城を<sup>じやうけん</sup>すぐ<sup>じやうけん</sup>にわた<sup>じやうけん</sup>されるか」と<sup>じやうけん</sup>条件<sup>じやうけん</sup>を出<sup>じやうけん</sup>し、海舟は「<sup>城は</sup>、おわたし<sup>じやうけん</sup>申<sup>じやうけん</sup>そう」と<sup>じやうけん</sup>答<sup>じやうけん</sup>え、江戸総攻撃は<sup>じやうけん</sup>中止<sup>じやうけん</sup>とな<sup>じやうけん</sup>った。海舟は<sup>せいようれつきやう</sup>西郷に「<sup>せいようれつきやう</sup>今は<sup>せいようれつきやう</sup>日本人<sup>せいようれつきやう</sup>同士<sup>せいようれつきやう</sup>が<sup>せいようれつきやう</sup>争<sup>せいようれつきやう</sup>っている<sup>せいようれつきやう</sup>場合<sup>せいようれつきやう</sup>では<sup>せいようれつきやう</sup>ない。西洋<sup>せいようれつきやう</sup>列強<sup>せいようれつきやう</sup>に<sup>せいようれつきやう</sup>対<sup>せいようれつきやう</sup>抗<sup>せいようれつきやう</sup>する<sup>せいようれつきやう</sup>には、<sup>せいようれつきやう</sup>諸藩<sup>せいようれつきやう</sup>が<sup>せいようれつきやう</sup>互<sup>せいようれつきやう</sup>いに<sup>せいようれつきやう</sup>話<sup>せいようれつきやう</sup>し<sup>せいようれつきやう</sup>合<sup>せいようれつきやう</sup>い、<sup>せいようれつきやう</sup>協<sup>せいようれつきやう</sup>力<sup>せいようれつきやう</sup>する<sup>せいようれつきやう</sup>必要<sup>せいようれつきやう</sup>があ<sup>せいようれつきやう</sup>る」と<sup>せいようれつきやう</sup>伝<sup>せいようれつきやう</sup>え<sup>せいようれつきやう</sup>た。日本の<sup>せいようれつきやう</sup>未来<sup>せいようれつきやう</sup>を<sup>せいようれつきやう</sup>思<sup>せいようれつきやう</sup>う<sup>せいようれつきやう</sup>2<sup>せいようれつきやう</sup>人<sup>せいようれつきやう</sup>の<sup>せいようれつきやう</sup>信<sup>せいようれつきやう</sup>頼<sup>せいようれつきやう</sup>関<sup>せいようれつきやう</sup>係<sup>せいようれつきやう</sup>が、<sup>せいようれつきやう</sup>争<sup>せいようれつきやう</sup>いを<sup>せいようれつきやう</sup>防<sup>せいようれつきやう</sup>い<sup>せいようれつきやう</sup>だ。

◆<sup>むけつかいじやう</sup>江戸無<sup>むけつかいじやう</sup>血<sup>むけつかいじやう</sup>開<sup>むけつかいじやう</sup>城<sup>むけつかいじやう</sup>の後<sup>むけつかいじやう</sup>は、<sup>とくがわけ</sup>徳川<sup>とくがわけ</sup>家の<sup>おめい</sup>汚<sup>おめい</sup>名<sup>と</sup>を<sup>と</sup>取<sup>と</sup>り<sup>と</sup>下<sup>と</sup>げ<sup>と</sup>て<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>ら<sup>と</sup>う<sup>と</sup>た<sup>と</sup>め<sup>と</sup>に<sup>と</sup>新<sup>しんせいふ</sup>政府<sup>しんせいふ</sup>と<sup>か</sup>駆<sup>か</sup>け<sup>か</sup>引<sup>ひ</sup>き<sup>ひ</sup>した。その後<sup>ご</sup>徳川<sup>とくがわけ</sup>家は<sup>ゆる</sup>許<sup>ゆる</sup>され、海舟は<sup>しんせいふ</sup>新政府<sup>しんせいふ</sup>で<sup>はたら</sup>働<sup>はたら</sup>き<sup>はじ</sup>始<sup>はじ</sup>めた。政府<sup>そうだんやく</sup>の<sup>めいじいしん</sup>相<sup>めいじいしん</sup>談<sup>ご</sup>役<sup>ご</sup>として、<sup>めいじいしん</sup>明治<sup>ご</sup>維<sup>ご</sup>新<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>も<sup>ご</sup>日本<sup>ご</sup>を<sup>ご</sup>見<sup>ご</sup>守<sup>ご</sup>り、<sup>ご</sup>支<sup>ご</sup>え<sup>ご</sup>続<sup>ご</sup>けた。